



『奇跡の社会科学』  
中野剛志著 (PHP研究所)

本館	請求記号：X/081/P56/1321	資料ID：701808677
Knowledge Base	請求記号： /300/N39	資料ID：701810145

## 経済学部教授 坂口 明義

社会科学の偉人たちが遺した古典への入門書である。取り上げられるのは、ウェーバー（社会学）、バーク（政治学）、トクヴィル（政治学）、ポランニー（人類学）、デュルケーム（社会学）、カー（国際関係論）、マキアヴェッリ（政治学）、ケインズ（経済学）の8人。彼らの議論を順に紹介しながら、現代社会の諸問題も読み解こうという本だ。ウェーバーとバークからは日本の企業・政府が「改革」に失敗してきた理由、トクヴィルからは現代政治に忍び寄る全体主義の危険、ポランニーからはグローバル化が社会危機をもたらす理由がわかるという。またデュルケームは日本の自殺者数が多い理由を、カーは現在の戦争の根本理由を教え、マキアヴェッリは日本政治の硬直性の危険性、ケインズは投機を助長する日本の経済政策の危険性を示唆しているという。

言及される問題はどれも、過去四半世紀に深刻化したものばかり。グローバル化とともに各国社会のフラット化が進んだことに対応して、この間、学問分野の細分化も強まってしまった。しかしこれでは現代の複合的な諸問題は解決できない。そこで社会科学の古典に立ち戻る必要性が叫ばれるのだが、「言うは易し行うは難し」。古典を読むのは大変だ。その点、本書は古典からの引用文にも触れながら、現代の問題も読み解くという一石二鳥的な工夫の中で、第一次接近ではあれ、ともかく主要古典を我が物にできる。社会科学の入門書として推薦したい。